



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

秋は科学研究費補助金(科研費)という国から配分される研究費の応募書類を書いたものである。教授、准教授、講師、助教といった大学教員は、文部科学省所管の「日本学術振興会」が公募するこの研究費配分事業に対し、研究に必要な費用を電子申請するのである。

〈41〉科学研究費補助金

秋は科学研究費補助金(科研費)という国から配分される研究費の応募書類を書いたものである。教授、准教授、講師、助教といった大学教員は、文部科学省所管の「日本学術振興会」が公募するこの研究費配分事業に対し、研究に必要な費用を電子申請するのである。

科研費は、人文科学や自然科学すべての領域の研究が対象である。領域は細分化され、例えば私の場合、

と、その研究計画に対して研究費が翌年度から支給される。文部科学省によると、新規の応募の場合、平成27年度の全体の採択率は28・1%であった。

採択されるには、短期間に成果が見込めると評価されるのが重要である。応募書類には、「研究期間内に、何をどこまで明らかにするのか」を明確に記載することが求められる。

ただ、未知のものを研究するのには「何をどこまで」とは書きにくい。書式が求められる活動は「研究」ではなく「開発」ではないかと思ったりもする。

大学では、この時期にならざるに採択され多額の研究費をもらっている教員が、科研費応募書類の書き方について講義を行う。「科研費獲得のコツ」といった内容の攻略本まで出版されている。

私の経験では、思いがけず採択された研究課題もあれば、独創的だと思っていた研究課題が落ち続けたこともあった。お世話になった基礎医学の先生は「科研費が当たる」という表現を使っておられた。研究費は有力な研究者のいる大学に集中しがちという報道記事を読んだこともある。一方、審査員は同じ領域の研究者であり、多数の応募書類を短期間のうちに評価しないといけない。

はやりの研究や成果が期待されているテーマに集中するのではなく、地味ではあるが謙虚に熱意を持って仕事をしている研究者に、広く研究費が行き渡ってほしい。素晴らしい発見は思いがけないところから得られると思う。